

Title	State of Belonging and UnBelonging : A Study of Familial Themes in Major Works of Amitav Ghosh in Reference to Toni Morrison
Author(s)	Sattar, Sanyat
Citation	
Issue Date	
oaire:version	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59401
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/resource/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【5】

氏 名	サターアー SATTAR, <small>サンヤット(サニヤット)</small> SANYAT (Sanyat Sattar)
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 4 9 1 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 23 年 9 月 20 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	State of Belonging and UnBelonging: A Study of Familial Themes in Major Works of Amitav Ghosh in Reference to Toni Morrison (「Belonging」(付属)と「UnBelonging」(無付属)の有様: トニ・モリソンに言及しながらアミタヴ・ゴーシュの主な作品における家族に関わる主題の研究)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 森岡 裕一 (副査) 教 授 服部 典之 准教授 片渕 悦久 准教授 石割 隆喜

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、序論、五章からなる本論、および結論で構成された英文 150 頁、400 字詰め原稿用紙換算で約 450 枚に相当する論文である。インド出身の現代作家アミタヴ・ゴーシュの主要な関心は、土地、国家、コミュニティに対する帰属意識である。彼は、まずインド亜大陸における複雑な歴史、すなわちインド・パキスタンの分割、バングラデッシュの独立という現実政治によって引き裂かれた人々の帰属意識を植民地主義の悪しき遺産という観点から考察する。ついで、国民国家というひとつのフィクションと宗教的、文化的伝統の齟齬の問題や、敵対する文化背景における帰属意識のもつユートピア願望の性格、さらには、真のコズモポリタニズムとは何かといった問題にまで考察の射程を広げている。東アジア固有の問題と見られるテーマが、その深層においてより普遍的な問題性をはらんでいることを実証するため、ゴーシュを評価するアメリカ黒人作家トニ・モリソンをとりあげ、そのいくつかの作品をゴーシュ作品と対照させながら分析を進めている。その際、両作家が関心を示す家族の人間関係、とりわけ、ばらばらに切り離された家族それぞれが抱く血縁、地縁、国籍等の意識のずれに焦点を当て、インド亜大陸における植民地時代の歴史、アメリカ奴隷制という近代史の流れを背景において、文学的アプローチと社会学的、文化人類学的アプローチを融合した手法を駆使して作品分析を行っている。

第一章では、*The Shadow Lines* (1990) を材料に、帰属意識がいかにか空間化されるかを、二人の女性主人公の人生をたどることで考察している。二人は一見、自由を求める生き方を貫いたように見えるものの、彼女たちの求める理念的かつ精神的な帰属意識が、地理的に制約され空間化された帰属意識に侵略され、その結果、自己実現を阻まれた犠牲者でしかない様子が読みとれる。一人は、誕生の地東パキスタンが故郷でありながら、ヒンズー教

徒として現在の生活の拠点インドが「母国」である存在であり、もう一人は、コズモポリタンたらしとするものの、その実、どこにも帰属しえない根なし草としての生活を強いられる存在でしかない。Belong する動きが結果として UnBelonging を招くという皮肉な逆説が描かれている様が鮮やかに分析されている。

第二章は、*The Hungry Tide* (2004) を通して、一人のスコットランド人ビジネスマンが、ベンガルを第二の故郷とすべく奮闘する様をたどっている。国民国家という制度のもつ圧倒的な支配力の前に無力とも思えるユートピア・コミュニティの創造が、楽観主義的印象にもかかわらず、ゴーシュの体験に裏打ちされた深い祈念の思いにより、実現可能と思えるほど説得力ある描かれかたがなされており、人類の未来の一つの可能性を示唆している点がすどく指摘されている。

第三章は、*Sea of Poppies* (2008) を扱う。この作品では、様々な背景をもつ人物が、本来の土地から切り離され、モーリシャスに向かう船に集められた状況が語られる。彼らは植民地主義やカースト制度などの犠牲者であり、移民を余儀なくされた人々だが、移民船という空間の中では、国民国家の前提となる人種・民族・宗教などの差異が相対化され、多様な価値が共存する疑似空間を形成している舞台となっている。個々の価値観の違いを認めつつ、それらを包摂する共同空間をいかに創出しようかの壮大な実験がこの小説であることをすどく指摘している。

第四章と第五章は、トニ・モリソンを対照軸にして、帰属する空間をもたない生が必然的に伴う哀しみの考察、および、その解決策の模索を読みとる試みである。第四章では、モリソンの *The Bluest Eye* (1970) を対比的に用い、第三章まで詳細に分析されてきたゴーシュの文学に充満する憂鬱さの起源を、帰属する空間の欠如の根源にある愛なき世界に求める。それは、また、アフリカ系アメリカ人の哀しみを描いたモリソンの作品の中にも見出されるものである。第五章では、*In an Antique Land* (1992) を材料に、多文化社会における異なる価値観の共存、寛容なる精神の醸成を願うゴーシュの思いを読みとり、厳しい現実認識を経たうえで、あるいはそれゆえに肯定的な姿勢を保持し続ける彼の作品が、混迷をきわめる現代において受容されている理由だと結論づけている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、現在アメリカに拠点をおき国際的に活躍するアミタヴ・ゴーシュが出身地インドの歴史的状況をふまえ、ポスト・コロニアル的視点から、国家と個人、政治と文化、人種と宗教、時間と空間といった対立項の中で、いかに帰属し自己実現を成しようか苦闘する人間の有様を描いた様子をテキストに即して緻密に跡づけたものである点で説得力がある。それは、バングラデッシュ国民である申請者にとって切実な主題に真摯に向き合った結果である面が大きい。さらに、議論を東アジアの特殊な状況に留めることなく、アメリカの黒人の抱える状況とパラレルにとらえるため、トニ・モリソンを対比的に使うという野心的な方法論も評価することができる。また、議論を進める枠組みとして Belonging と UnBelonging という鍵概念を駆使して、様々な要因が絡む複雑な状況を整理して提示する姿勢には一定の有効性が認められる。

むしろ、本論文に問題がないわけではない。モリソンを対比的に使用する理由について、他の作家ではなくモリソンでなければならない必然性についてより確たる根拠があつてし

かるべきであった。また、Belonging をはじめとする概念についても、曖昧性が残っており、拡大解釈のあまり議論が拡散し、説得力に欠ける記述も散見される。しかし、それらの点は本論文の価値を損なうものでは決してなく、よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。